
30 thirty

かしわ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

30 thirty

【Zコード】

Z4573

【作者名】

かしわ

【あらすじ】

愛でもなく、恋でもない、その関係。一人を繋ぐのは、透明で、無機質な、思い　　それは、切なく、残酷な心
真白な箱庭で繰り返される、終わりのない物語。
(予告編)

(前書き)

まごどり、ありがとうございます。かしわ、です。

こちらは、次回作の予告編です。あまりにも筆が進まないので、自分を追い込んでみました。。。

なので、短編扱いですが、たぶん、きっと……続きます。

透明で美しいものから
傷つけられたといって

透明で美しいものを
恨んではいけない

透明で美しいものは
傷つける性質のものだから

『透明で美しいもの』 銀色夏生

まろい光が見えた。

明かりは、淡く、朝の光とは、まったく違っていた。
似ているとすれば、プールの底に寝そべって見た空から降る、光の
粒だ。水中で乱反射した光は、柔らかく、きらきらと木漏れ日に似
た光と変わったのだ。

『……』

音？

いや、これは人の声。

耳に届き、じんわりと馴染んだ頃に、それが『言葉』であることに
気付く。けれど、それが奇妙なのだ。まるで、初めて出会ったこと
のような感覚を覚えた。

一度『言葉』と認識されれば、音の羅列はもう一度と、一音だけの
魅力を得られず、意味をもつた塊となってしまう。

『……』

なんだろう、よく知つていた気がする。

まろい光と同じく、思考にもぼんやりと霧がかかつていた。

ああ……どうして私は眠つているのだろう。

…… そうか、今、あたしは『眠つて』いるんだ……。あたしは、今、
目覚めのまどろみの中にいるんだ。

でも、いつ眠つたのだろう……？

そもそも、あたしは……？

ああ、つづつと、痛みが頭に響く。脳の中心が収縮し、掴みきれない
記憶を絞りだそと頑張つている。

ああ、つづつ

『……』

ああ、つづつ

『……』

ああ、つづつ

『……』

『……』

ああ、つづつ

『……』

ゆつ

ゆひやせ、ゆゑ、ゆひ、ゆひじん、ゆひじん、ゆひ、ゆ
わい、ユキワ、由紀子、華子、有紀子、由貴子、……

「嘘トー...」

キイイイイイイイイツイツツ...-----!

突然の、ブレーキ音

舞い降りたのは、漆黒の闇

『コキ』

やわやわ、と肩を揺ゆかれて、眠りから、弓削がつけ出された。
でも、その感覚は、よく知っているものには思えず、触れあう箇所
からは、やんわりとした労わりと躊躇いが滲み漏れて感じ取れた。
ううんと、まどろみのまま、寝返りをうつ。

重く、閉じた瞼を、開けようと、力を込めた。

けれど、それはなかなか叶わない。

柔らかな光が瞼をくすぐって目覚めを促されび、まるで、生まれ
てこの方一度も、瞳を開いたことがなかつたかのように、瞼は固く
その扉を閉ざしてこた。

ゆつくり、少しづつ、一ノコ一ノリ、持ち上げる思ひ扉。

その隙間から差し込む、微かな光は、小さい。なのに、以前テレビ
で見た、宇宙の日の出を思い出した。

ただの、田覚めとまどろみが、まるで、この世の誕生のように、心
を打つのだ。

涙が一滴、まなじりから伝い落ちた。

「ユキ！」

瞬きを一つゆっくりとある。

「あ」

見えたのは、真田な世界と、こちらを見つめて佇む男の人だった。

「言葉は、わかる？」

少しの間をあいて、男性は口を開いた。

『言葉ハ、ワカル』

同じ音を、頭の中で繰り返してから、少しだけ頭を動かして、頷いてみせた。

そうして、見知らぬ彼は、それを確認すると、安心したように、クシャリと顔に皺を寄せて笑った。

その様子は、どこか柴犬に似ていた。
わんこがパタパタ尻尾を振つて出迎えてくれているような、無防備で、なにも求めない、笑顔。

「起きてすぐに申し訳ないんだけど、いくつか質問をしたいんだ。いいかな？」

そんな様子に安心したからか、彼の言つ意味をきちんと理解する前に、二つと頷いていた。

「名前は？」

「……佐藤、雪子……」

仰向けのまま、発する言葉はぐもつとして、自分の音には聞こえなかった。

やはり、頭はまだうまく働いてくれず、問われたことと、疑問を感じる間もなく、反射で応えてしまつ。

「年齢は？」

「17」

「生年月日を言える?」

「19××ねん、1-1がつ3か」

「1)家族は?」

「かぞく?」

なぜか、思考が止まつた。

れどひゅきい)

『佐藤雪子』17歳の高校2年生。

脳が告げる情報は、たつたそれだけだ。
かぞく、つて、何だつけ?

言葉と音だけが、頭の中でぐるぐると回つ、やの答えは浮かんではこない。

言葉に詰まつて、ただ、固まつていると、彼はそれを振り払つかのよつて、次の質問を投げかけた。
まるで、この質問は、無かつたかのよつ。

尋ねられる質問のほとんどは、ほとんどやりと頭の中で漂つだけで、答えを紡ぐことはできなかつた。

その度に、自分の中に、靄のかかつた景色が浮かび、何とかその正体を突き詰めようと、田を細めて探る。
けれど、田を凝らすほどに、その靄は濃くなり、微かに見えていた姿さえも、刹那の内に消え去つてしまつていた。

記憶を辿れない……その失望を感じる間もなく、質問が飛び込む。

そのおかげか、心は不思議と軽いまだつた。

延々と続く問答は、唐突な質問で終わりを告げた。

「今日は、何年の、何月、何日？」

また、ぐらりと、景色が歪む。それは脳内から引き出した記憶の欠片。

先程までと同じく、諦めを感じつつも、目を凝らして、その姿を見つめた。

ぼやけた視界。それが意外にも、ゆっくりと、カメラのピントを合わせかのように、揺らぎが薄らいで、はっきりとした輪郭を持つていった。

そして、壁に掛けられた、カレンダーが、見えた。

「20××年……9月29日、もくよしひ、です」

呟いた声は、しつとりと空気に溶けた。

静けさが、冷えた空気の室内に舞い降り、奇妙な緊張感が身を包んだ。それまで、淡々と質問を重ねていた彼が、ぴたりと、口を閉ざしてしまったから。

つこと見上げれば、真白な世界が広がる。

首を巡らせば、そこが窓一つない、全くの密室であると知った。

けれど、部屋には光があふれ、限りある空間には、雪原にも似た無限を感じた。

なんだか。これは、夢？

唐突な目覚めあけの出来事は、上手く受け入れられなくて、非現実と判断する方が容易い。

なのに、ブレーキ音の響きが、リアルに耳にじびり付いて、胸を騒がせた。

「うん……まだ、記憶が不完全なんだね……」

ぽつり、と独り言のような、彼の呟きが耳に届く。

見上げた表情からは、当然なんの情報も読み取れなかつた。のっぺりとしているとも言える、彼の面は、その感情さえも正確に読み取れるのかもわからない。それでも、問うべき疑問も分からないのに、何か答えが欲しくて、視線は彼を捉えていた。

「ごめんね、説明もなしに、一方的な質問ばかりをして。……言い訳すると、君の状態がどの程度か分からなかつたから、確認前で闇雲に話をできなかつたんだ」

そう言って、クシャリと皺をつくり、見せる笑顔はやっぱり、犬に似ていた。

無言で、じいと、見つめてくる視線に照れたのか、口の端をくずして笑みを作り

「ああ、そうだ。自己紹介をしておかないとね。僕は、佐藤チヒロ。ここでの君の“これから”をお世話します」

突然思い立つたように、自己紹介をした。

「君と同じ『佐藤』だから、チヒロって呼んで」

「チヒロ……さん？」

訳が分からぬまま、とりあえず口に出して、尋ねてみれば、こくり、と笑顔を見せて、肯定を示した。

ここがどこなのかも、現実かさえも分からぬのに、やっと貰つた言葉は、なんの答えも示してくれない。

だけど、柴犬みたいな人懐っこい笑みを浮かべる彼がいてくれると、初対面のはずなのに、どうしてだか不思議と家族と一緒にいる時のような、安らぎを感じたのだ。

これが、あたしと、チヒロさんとの、はじまり。

(後書き)

引用文献

銀色夏生 1988 『あの空は夏の中』 角川文庫

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4573j/>

30 thirty

2010年10月9日01時13分発行